

「やればできる」という思いを感じ、自己有能感や達成感を高めることのできる授業

題材名 「ニコニコスープ皿の製作」	日時	平成24年 2月17日(金) 2校時		
	対象	中学部 陶芸班	指導形態	作業学習
	場所	中学部陶芸室(2階理科室)		
	講師	宇都宮(T1), 小畑(T2), 川上(T3), 福元(T4), 松尾(T5), 花田(T6), 梶原(T7)		

題材における生徒の実態

本年度の中学部陶芸班の構成は、1年生6人、2年生4人、3年生4人の計14人である。学年構成が縦割りになっており、生徒の実態は様々であるが、1年生は作業学習に対する意義や目標の初期段階について、2・3年生は学年ごとに培ってきた意識や基本姿勢等について学んでおり、学習形態の面から考えると指導上の生徒構成のバランスは取れている。14人全員が本年度初めて陶芸班に入ったが、これまでの学習を通して、粘土を扱う作業に慣れてきており、製作活動に対しての意欲を高くもち、毎回製品を完成させる喜びを全員で感じることができている。その反面、これまでの作業学習において、集中力・持続力に欠けていたり、製作態度や他の生徒との協力態勢が取れていなかったりする場面も多く見られる。また、製作の内容や工程等に対する理解や、安全に対する配慮不足等にも個々の差は大きく、個に応じた特別な配慮の必要性を強く感じる。

題材の意義・価値

中学部の作業学習では、授業の形態を陶芸・家庭・木工の3班に分け、各作業班で「時間を守ること」「あいさつ・返事をする事」「協力すること」「安全に気を付けること」を全体的な中心目標として指導を行っている。さらに「やればできる」というキーワードを考慮し、各作業工程の中で、個の課題に応じた作業を設定し、「やればできる」という意識をもつことができるようにしている。

陶芸班では、3学期の題材を「ニコニコスープ皿の製作」とした。この題材の特徴として、生徒自身がデザインしたり、器状の形成や取っ手作り、スタンプ押し等の多様な作業工程を組むことができたりすることがあげられる。また、粘土の特性上、授業時間内に製品を完成しなければいけないため、具体的な個数の目標を設定するなど短期的な見通しをもって作業に取り組むことができることも本題材の意義・価値であるといえる。

キャリア教育の視点から考えても、中学部段階におけるキャリア発達の実態を踏まえて学習活動が構築できる題材であるといえる。具体的には、生徒の実態に応じた作業内容や補助具等の工夫がしやすく、共同作業(流れ作業)での製作であるために、生徒間でのあいさつ、他者との協調性等を学習することができると思われる。

ねらい

本題材では流れ作業での製作を取り入れていくため、各生徒の分担をより明確にすることができる。作業に対する持久力と忍耐力、さらに失敗を反省して自己解決しようとする力を養っていきたい。また、作業の協力態勢や、依頼・応答等の必要とされるコミュニケーション力も高めていきたい。

指導観

毎回の授業の中で、チェックリストの短期目標(題材における具体的な目標)と「やればできる」ポイントと照らし合わせて、それぞれの担当間で指導上での共通理解事項等を確認している(研究紀要P52参照)。

具体的には、担当外の教師からも指導を受ける場面(工程間の受け渡し等)において、教師間の指導内容の違いが生じないようにするために、全体的な流れの中でも共通理解し、生徒独自の課題に応じた指導がスムーズにできるように留意している。さらに各生徒の現在の実態や課題に合った教材・教具や補助具等の開発や工夫を行い、必要な支援を選択して過度な支援に注意をする。それによって、生徒が「やればできた」という成就感、達成感を十分感じられるようにしていきたい。

展望

作業学習で学習したことを他の教科で生かすとともに、「やればできる」という達成感を、他教科でも感じてほしい。また、普段の生活の中であいさつ・返事をする、見通しをもつ、協力する等のできるようになり、次のステップの「やりがい」につながるようにしていきたい。

指導上の留意点

- 教具・補助具の選定・開発では、全ての教具・補助具に対して「作りやすくするためのもの」ではなく、「作業を一人で進めることで、『やればできる』という意識を高めることができるためのもの」という意識を共通理解し、選定・開発を行う。
- 身に付けさせたい力を、生徒の習得している知識・技術と、個別の指導計画や「やればできる」ポイントを基に分析して、必要な支援内容を焦点化する。得た情報は、その都度チェックシートに記入する。
- 実態に応じた流れ作業が構築できるようにするために、「粘土まとめ」グループ、「切り取り」グループ、「形成」グループに分けて指導を行う。

指導目標

【全体目標】

目標設定の観点	全体目標	添付する項目
① 関心・意欲・態度面より	<ul style="list-style-type: none"> ・ 決められた時間いっぱい、作業に集中することができるようにする。 ・ 実態に応じた依頼や応答等ができるようにする。 	I-2 I-3, I-4
② 技能面より	<ul style="list-style-type: none"> ・ 補助具等を使用して、できるだけ一人で作業を行うことができるようにする。 	II-2 III-4

【個人目標】

	目標	指導の手立て
A	一定時間作業に取り組むことができる。 (I-2)	視覚的に判断できる確認表を準備し、作業に取り組む時間を延ばすことができるようにする。
B	適切な作業態度を身に付けることができる。 (III-3)	態度や依頼、応答の方法等をその都度指導し、作業に対する基礎的な意識を高めるようにする。
C	周囲の作業状況を確認をしながら、作業を進めることができる。 (III-3)	自己チェックの方法を確立させることで、自信をもって作業を進めることができるようにする。

指導計画

総時数 75 時間

次	主な学習活動	時間	備考
一	○ 製作物をデザインし、試作品を作る。	5	
二	○ 個々で製作をし、工程を覚える。	6	
三	○ 流れ作業で製作を行う。	5 6 本時 (51/56)	
四	○ 釉薬がけ、窯詰め、窯出し、仕上げをする。	8	他題材と並行実施

本時の学習

1 目標

(1) 全体目標

- ・ 本時での自分の工程を確認し、理解することができる。
- ・ 周りの生徒と協力態勢を築きながら、自分の担当工程に取り組むことができる。

(2) 個人目標

	目標	指導の手立て
A	教師と一緒に自分の作業場所で粘土を2個まとめることができる。	視覚的に理解できるようにするために、確認表で区切りの個数を2個と定めて取り組むようにする。
B	一人で粘土を一定の大きさにまとめることができる。	できるだけ一人で作業ができるようにするために、補助具の使い方や手順を毎回確認する。
C	一人で仕上げの確認を行い、次工程に受け渡すことができる。	仕上がりの確認表を使用して、自信をもって次工程に受け渡せるようにする。

2 指導に当たって

これまでの学習で、流れ作業においての製品完成までの見通しをもてる生徒が増えつつある。しかし生徒相互の協力態勢、作業中のあいさつ・返事、完成製品に対する仕上りの確認等はまだ定着しているとは言えず、不十分である。

そこで、本時では製作に対する態度や技術の経験をより深めることで、よりよい作業態度の定着を図りたい。そのために以下のことに注意して指導を行いたい。

- (1) 作業に対する主体的な態度を養うことができるように、生徒の実態に応じた教材教具や補助具を準備し、できるだけ一人で作業を進めることができるようにする。
- (2) 製作に対する意識を高めて作業に取り組むことができるようにするために、個数目標を具体的に意識できる教材を準備し、授業の導入で活用する。
- (3) 生徒の実態に応じたあいさつや返事を行うことができるようにするために、生徒間のやり取りをしっかりと聞く。不十分な場合は、その都度指導を行ったり、上手にできた場合は賞賛を行ったりする。
- (4) やり直しが起こった場合には、その都度反省点を明確に伝え、改善点を理解できるようにする。
- (5) 作業工程の速度が一定になるように、各工程の担当教師が前後の工程の状況を見て、ペースの調整をする。
- (6) 各生徒の「やればできる」ポイントを、「やればできる」チェックシートで事前に十分に共通理解し、T・Tが円滑に行えるようにする。
- (7) 「やればできる」ポイントについて授業後に評価を行い、達成したことや新たな課題があれば、チェックシートに記入して、次時につなげるようにする。

3 実際

※別紙参照

4 評価

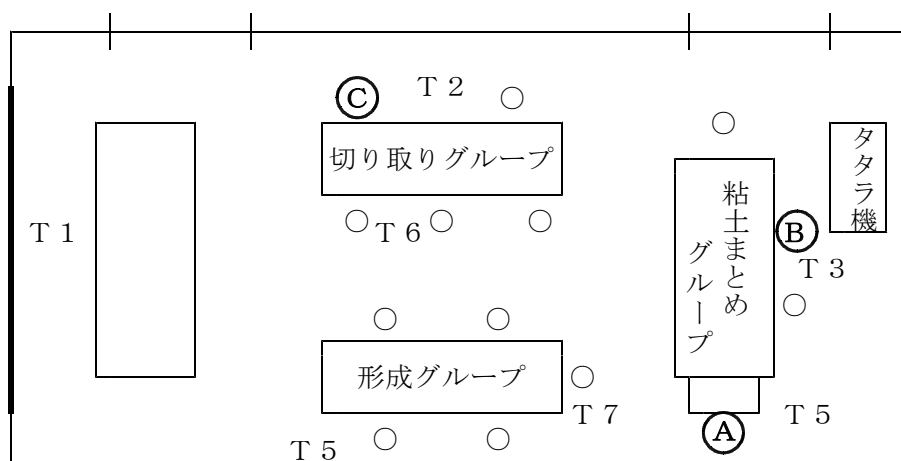
【全体の評価】

- ・ 決められた時間いっぱい、作業に集中することができたか。
- ・ 実態に応じた依頼や応答等を行うことができたか。
- ・ 補助具等を使用して、できるだけ一人で作業を行うことができたか。

【個人の評価】

	生徒の評価	手だてに関する評価
A	一定時間作業に取り組むことができたか。	視覚的に判断できる確認表を準備し、作業に取り組む時間をのばすことができたか。
B	適切な作業態度を身に付けることができたか。	態度や依頼、応答の方法等をその都度指導し、作業に対する基礎的な意識を高めることができたか。
C	周囲の作業状況を確認をしながら、作業を進めることができたか。	自己チェックの方法を確立させることで、自信をもって作業を進めることができたか。

5 場の設定



一人一人の実態から

氏名

題材等に関する実態

キャリア教育の視点から

	言語理解等	知識・技能等	意欲・態度等	校内実習から	キャリア発達の視点から
A	発語はほとんどないが、手を引いたり、具体物を持ってきたりして、意思表示をする。自分の名前等については理解できている。日常生活における基本的な指示も理解できる。	手のひらを使うような作業はできるが、指先を使う作業は難しい。また、安全に対する意識が低いので、道具を使用する際には教師の支援を要する。	同工程に対して1分程度は取り組むことはできるが、他に注意がそれてしまいがちで、作業が滞ってしまうことが多い。その際には、離席や散策行動が多く見られる。	前期実習では、作業自体に抵抗があり、情緒を乱す場面もあったが、後期実習では、目標個数を設定することで、離席せずに作業に取り組む姿が見られた。	【自他の理解能力】 掲示物や他者の行動に対して、自分の中の思いとの相違点を見つければ、衝動的に行動して、修正する姿が見られる。このことから、『集団参加』や『集団における役割分担と実行に関する能力』に課題があるといえる。
B	いろいろな言葉を知っており、確認や依頼等の応対が上手にできる。実年齢並の言語を使用することもあるが、時と場を選ばずに発言したり独り言を大声で言ったりする場面も多く見られる。	言語は豊富だが、言葉の意味を理解して発言することは少ない。また、手指の巧み性は未発達で、字をなぞったり視写したりすることが困難である。道具も正しく扱うことは難しい。	学習場面でけじめをつけることが難しいが、機械等の道具を使用する活動には、意欲的に取り組むことができる。その反面、集中力が切れると、独り言を言ったり、手遊びをしたりすることもある。	機械や道具に興味があるので、実習期間中継続して使用する道具を決めることで、意欲を持続させることができた。しかし、集中力や注意力を持続させる時間が短いため、ふざけてしまうこともあった。	【役割把握・認識能力】 自分と他者との連動で作業を行っているという意識が育っていないため、自分の担当する作業に対し、責任をもって取り組んでいる姿はあまり見られない。また、作業工程には関係のない作業を好み、作業が滞ることがある。『学校や家庭等における役割の理解と実行』に課題があるといえる。
C	言語での指示を理解し、行動に移すことができる。その反面、休み時間には積極的に話し掛けることができるが、授業の場では自分から相談や質問をすることは苦手である。	陶芸の作業において、焼成までの流れをある程度理解している。また、細かい作業も、道具を活用して取り組むことができる。手元や周囲の安全に気を付けながら道具を使用することができる。	自信のなさが見られる場面があるが、担当する作業に責任をもって取り組むことができる。自分に任された作業に集中し、時間いっぱい取り組むことができる。	完成の度合いを自己チェックする姿が見られ、自分の工程に対する責任を感じている姿が見られた。その反面、あいさつや返事を恒常的に行う様子は、実習においては見られなかった。	【課題解決能力・選択能力】 陶芸の作業に対する技能や態度は、ある程度評価できる段階であるが、自信をもって作業を進める力や意思を積極的に表出する力に課題を感じる。『興味関心に基づく選択』や『活動の振り返りと次に生かそうとする努力』に課題があるといえる。

	主な学習活動	指導上の留意点		
		生徒A (粘土まとめ・タタラ機班)	生徒B (粘土まとめ・タタラ機班)	生徒C (切り取り班)
導入 10分	1 始まりのあいさつ 2 出席確認 3 前時の振り返り 4 本時の活動内容確認 5 四つの目標確認 ・時間を守る ・あいさつ・返事をする ・みんなで協力する ・安全に気を付ける	<ul style="list-style-type: none"> 前時の製作物を実際に確認することで、より具体的に思い起こすことができるようにする。 完成度についても触れ、仕上がりの重要性も意識して製作に取り組むことができるようにする。 		
展開 45分	6 各作業工程に分かれての活動 <粘土まとめ・タタラ機> ①粘土をたたき伸ばす ②タタラ機にかける ③次の工程に依頼する <切り取り> ④型を粘土に合わせる ⑤切り取る ⑥接着面に傷をつける ⑦次の工程に依頼する <形成> ⑧器状に形成をする ⑨取っ手を接着する ⑩仕上げをする ⑪完成個数を確認する	① タタラ機にかけやすいよう麺棒で均一に粘土を伸ばす。 その都度適量を置くことで、均一な粘土まとめができるようにする。 目標個数を意識できるようにするために、できたカードを活用し、作業に取り組む時間を視覚的に理解できるようにする。	① 粘土を適切な大きさ・厚さにするために、麺棒でゆっくり伸ばす。 粘土を潰しすぎないために、添え木付きの粘土板を使用することで、一人で調整ができるようにする。	④ 板状になった粘土の形状を考えて型を置き、効率よく切り取ることのできる配置を考える。 ⑤ 針を垂直に当てて、ぶれないように切り取る。余った粘土はT1かT2を呼び、回収を依頼する。
		② タタラ機の指定した位置に粘土を置きハンドルを回すようにする。 最後まで安全に作業ができるようにするために、教師と一緒にハンドルの位置を確認して回すようにする。	② まとめた粘土をタタラ機の方に合わせて置き、板状に形成する。 機械に対しての興味が高いので、タタラ機に注意を奪われないようにするために、粘土を置く位置を確認して作業に取り組むように配慮する。	⑥ 接着面となる傷の位置を間違えないようにして、適度な深さで傷をつける。 ⑦ 次工程の作業の流れを判断して依頼をする。 基本的には見守るようにするが、困惑した際はC自身から質問できるように、事前に質問することへの意識付けを行う。また、チェック表を活用して、自己チェックできるようにすることで、主体的に活動できる場面を増やすようにする。
終末 5分	※ 時間の都合上、片付けは簡易に行う。 7 反省・まとめ 8 終わりのあいさつ	<ul style="list-style-type: none"> 目標個数の確認では表に○印を付けわかりやすようにする。 反省は各グループから一人ずつ話し合いで発表者を決めることで、グループ及び全体で協力して製作したという意識をもつことができるようにする。 		

※ は個に応じた作業内容。 は対象生徒への留意点。